

◆ 第二話

じゃ蛇
ぶち淵

(昭和29年6月20日掲載)



遠い遠い昔のことです。竹田番定はどうかして立派な彫刻家になろうと思い、遙か都から九州路を下り、今では耶馬溪の片田舎、中詰の庄屋吉峯音右エ門の家の一間を借り受けて、彫刻に余念なく励みました。

それこそ寝食を忘れて努力した結果、或る日見事な木細工の水仙が出来上がり、不思議なこともあればあるもの、一晩のうちに見事な花を咲かし、その上芳ばしい水仙のにおいさえ漂って来たそうです。

それから番定が物の化につかれた様にして刻んだ木のぼりの金魚が、あまり見事なので水盤の中に入れると、それが水の中で愉快そうに泳ぎ廻るでは有りませんか。番定は之でこそ十年間も、この片田舎にうもれ寝食を忘れて努力した甲斐があったと思いました。主人の音右エ門も非常に悦んだことでしょう。

そこで或る日のこと、番定は音右エ門を呼んで、こう言いました。「私は彫刻家として世に立ちたいと志しましたが、あまり下手なので誰も相手にしてくれません。残念で残念でたまりませんので、お宅に長い間お世話になり、一心不乱に勉強したわけでありました。そこでどうやら一人前になりましたから、都へ帰って今後の修行に励みたいと思います。実は木製の鶴であります、まだ眼を入れてありませんから、今入れてさしあげましょう。」と云って両眼を入れ終わると同時に、爽やかな羽ばたきをして、その鶴は飛び立ってしまいました。

あまりの不思議さに音右エ門は茫然としていますと、今まで晴れていた空が一転にわかにかき曇って、雨がざあざあと降り出しました。すると番定は気狂いのようになって、縁から庭に飛び降り、嵐の中を走って行きました。

そして番定は気のめいた時には行って自分の心を慰める場所としていた、因縁のある深い深い淵に夢見心地のようにやって来たのです。「番定、番定」と嵐の中から声がします、不図見上げますと、白い衣に白い髭の老人が神様のようにそこに立っているではありませんか。番定は思わず平伏しました。

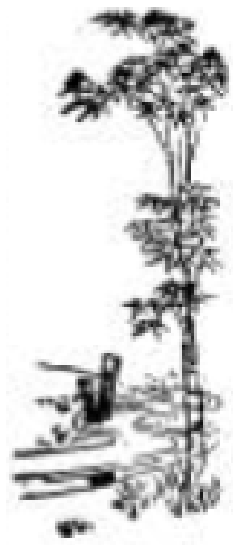
「我ハ久シク此ノ淵ニ住ム水神デア、今日目ノアタリ汝ノ神技ヲ見テ、汝苦心ノ賜ト悦ビニ耐エズ、即チ雌雄ニ頭ノ龍神ヲ刻ミ以ッテ吾ヲ守護セシメテ、汝ノ都ニ旅立ツ置土産トセヨ、汝ノ名ハヤガテ海内ニ並ブモニナキ彫刻師トナルデアロウ。」と老人は言いました。

番定は「私の彫刻が私の力だけとは夢にも思いませんでした、神仏の加護があったのでしたか、有難う御座居ます。つまらない私をかくまで引き立てて下さいました御礼に一心不乱に龍神を刻みましょう。」と約束しました。

それから早速自分の部屋に帰りますと又何と不思議では有りませんか、閉めてあったはずの仏壇が開いていて、そこに一ふりの見事な短剣が投げ出されてありました。番定はそれを有難く押し頂き、次の朝水垢離をとって身を清め、まる七日七夜、食事すら絶つようにして、龍神を彫りました。出来上がると番定は音右エ門と相談して、村人を集めて、五穀豊穰のお祭を営み、その淵で龍神に眼を刻みますと、二頭の大蛇はうれしそうに淵深く沈んで行きました。

番定は、おごそかに口を開き「私がこの村で十年間お世話になっている間に、皆さんから御餅をもらったり、赤飯をいただいたり、親切にして下さいました。私は、ここの水神様のお力添えを得て、龍神を刻みましたがこの淵は今後五穀豊穰の守護神となるであります。ひどい日照りの時は、蛇淵にお参りください。きっと雨を降らせてくださいます。」と云いました。

番定はなつかしいこの村里に別れを告げ、都へ旅立ちました。そして都で日本一と云われる彫刻家になったのであります。(完)



益永嘉之画